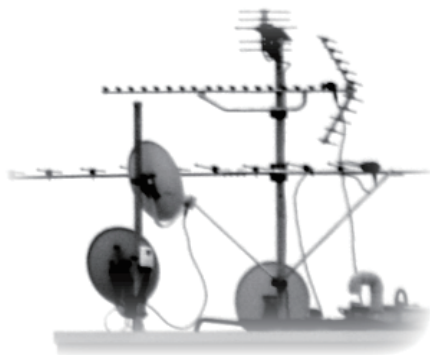


じふにさんろくじー 二〇一〇年版



うろこアンソロジー二〇一〇年版 目次

| | | | |
|------------------------------|---------|----|--|
| 恋唄 | 南原充士 | 3 | |
| まつとしきかば | 倉田良成 | 6 | |
| 野蜜の川で | 足立和夫 | 9 | |
| 新しい季節 | 三井喬子 | 12 | |
| 罪びとジャンヌ | 有働薫 | 15 | |
| 夜の灯の下で | 高田昭子 | 18 | |
| 三月、遙遠の。 | 石川為丸 | 20 | |
| 遠くへ | おかだすみれこ | 24 | |
| 空欄 | 清水鱗造 | 29 | |
| 水が走っている | 水島英己 | 32 | |
| 夜の海 | 一瀉千里 | 35 | |
| 時計 | 富澤守治 | 38 | |
| Over The Hills And Far Away° | 田中宏輔 | 46 | |

恋唄

南原充士

気分次第を許してよ

あたしがスターでいられるなら

大目に見てよ

お愛想のひとつぐらいは口をついて出るから

さよならのときはにこやかさをとりもどせる

だれとも特別の関係になりたくなんかない

と思う心のうらでは甘えたいのに

うまくわたしを引き出してはくれない だれも

白い家から出かけるのが好き

むりに夢見る強がりも

かわいいと思われていると思えばこそ続けられる

うたやおどりにアンニユイを和らげ

いつそうわたしを反抗的にする見えない血筋

わたしが必要なときにはきつとかなえられた

どんなにすなおであろうとしても

きらいになるとどうしようもなくきらいになる

時がめまいをくりかえし 悔いが胸をつまらせる

新しいものが古くなり 古いものがわたしを

古くすると感じさせないように

必要でないときは見ないでいたいから

わたしから離れていてほしい

失う痛みが刻々と感じられるほどの

年月の歩みの中で 身を投げ出したい気持ちに

バネを与えないですませているのはなぜか

くやしいからだと思うわ きつと

美人で気が強く生まれたから

いやなものをいやだと言っても

わたしを好くひとびとがわたしを囲み包んでくれるのだろう

このガラス質の心の取り扱いには注意してください

いいとも そのような飼育方法説明書付きなら

過去形の多い話し言葉の流れに乗せて

どこまでも胸に迫らせてやろうと

言って下さい

まつとしきかば

倉田良成

題しらず

立別れいなばの山の嶺におふるまつとしきかば今かへりこむ

在原行平

百にいくつか足らぬ齡で大往生した、一族の大刀自ともいうべき老女が亡くなって、その娘たちとその孫とその曾孫が集まって葬儀がいとなまれた。娘は全部で五人いて、孫は八人、その孫のつれあいの一人がこのおれで、さて、そういう部外者から数えると大刀自の曾孫の数はよく分らない。だいたい孫の数の倍数と見ておいた。これ以上の寿命を保っていたら玄孫の一人二人、あやうく出現していたところだ。喪主は老人の最期を看取った五人姉妹のうちの末娘で、ちよつとほかの四人とはわけありの距離がある。どんなわけありなのかと訊くと、五人姉妹の長女のそのまた長女である女房の機嫌をなぜか損ねる結果になるので、おれは蚊帳の外にしていることになっている。読経がすんで御齋おとぎ

になって、地方から出てきた次女のせがれが、東京ではなかなか手に入らない清酒の一瓶を隠し持っていることが判明した。あとでだれかと一杯やるつもりだったらしい。ところがその母親である大刀自の次女がそれを見つけ出し、はしゃいで大騒ぎしたすえに、だれもいともなんとも言わないうちにその栓をあけてしまう。次女のせがれは急遽その場の支配人に駆け寄って持ち込みの許可を取り付け、あまつさえ人数分の小グラスまでそろえて持つてこさせる。こいつは小さいころは家で、長じては会社で、よっぽど苦労していたに違いない。この酒がきつかけとなつて、なかなかややこしいことになっているらしい長女を筆頭とする四姉妹と末妹が少しうち解ける。五人姉妹のうちの三女がグラスを手にした末妹を、同じくグラスを持った長女のところへととりなしに連れてきたのだ。がやがやとした飲み食いの席で、気がつけば長女と末妹が並んで坐つてなにやらひそひそと話し込んでいる。親密そうなを見て、よかったじゃないかと女房に耳打ちしたら、長女の娘たる彼女が言うことに、あれで一件落着と思つたら大間違いだからね。暫くしたらまたもとの泥路ぬかるみに戻らないでもない。男つてほんとに単純なのね。そうかいそうかい。それはすみませんでしたね。でも見てみな。きみのおふくろさん、なんだか亡くなった一族の大刀自そっくりになってきたじゃないか。大刀自のその顔のまま、おや宴席の真つ最中、ふいの嗚咽を洩らし始めた。すると末妹も、末妹を引き合わせた

三女も、せがれが止めるのも聞かずおおはしやぎで杯を重ねていた次女も、ずっと奥の方に引っ込んで親子三人で固まっていた静かなる四女もみんな、突っ立ったまんま、幼女たちみたいに大っぴらにしゃくり上げはじめる。どこやらで鳴る風の嘯き。そうやって、泣いたり笑ったりそねんだり。しばらくは歌い、笹の葉に乗った精霊みたいに流れのなかでにぎやかに浮かんでいる。永遠に死ねもしないで。

野蜜の川で

足立和夫

みどりが切れていく
どこまでも光のつぶ
遠い荒れ野の
見知らぬ惑星の山頂で
ただひとりの神は
野蜜のように眠ったまま
死んでいた
首塚の電柱のはしから
蛇が三匹絡んで落ちて
闇黒のなかを這っていく
事務室のはじっこで

明け方までの夜の時間

通俗推理小説のぬくもりを読みふけた

机のうえでは

すでに男の人生はおわっていたが

闇黒のなかで息をついている

陰茎からは

黒ずんだ蛇の頭が垂れていた

見あげると

膨大な空の青の深さ

空は一瞬にして

何事かを隠しおおせた

死を抱えたひとの目には

知ることはできなかつた

河原のそばで

赤ん坊の泣き声が

響きわたっている

みどりの荒れ野のなかで

川の小石のように

永く響いている

限らないひろさの

銀河の果て

ちいさな惑星の空のふくらみでも

それは響いていた

茫然とした砂丘のつらなりにも

野蜜のよろこびがみちてきて

光の束が建っていた

新しい季節

三井喬子

なんだ？

と思わず言ってしまったが

それはわたしが捨てた

日々の白いハンカチに相違なく

暗い淵から

いくつもいくつも浮かんできて

水面に不定形に広がる。

意味もなく

風にふらつと舞い上がり

飛んだ

飛んだハンカチ

川の中州の枯れ木に干されている。

やがて乾くと

ピンと折れたたまれ

積み上げられる 石の上に。

次々と乾き 折れたたまれ

中州の枯れ木に白い花々が咲き

石が光り

ユリカモメがつついて崩すとまた積んで

次々飛んでくるハンカチに

ときおり枝の場所をゆずる。

なんと沢山のハンカチだ

なんと

青い空だ

春はひっそり揺れていて。

1941年愛知県生まれ。

1969年第一詩集『きのこ』…2009年第十詩集『青天の向こうがわ』

日本文芸家協会・ペンクラブ・日本現代詩人会会員

『イリプス』同人・個人誌『部分』発行

罪びとジャンヌ

有働薫

ジャンヌ・ダルクは十七歳になってまもなく家を出て、それから二年あまりの激動を生きた。ふたたび故郷の家に帰ることはなかった。彼女に罪があるとしたら、十七歳の若い身空で単身歴史に介入したことだろう。単身？いや、彼女を支える多くの人々がいた。故郷を出るために、郡長ボードリクールは付添いの兵と軍装を与えた。すでに南部シノンの王太子からは迎えの兵一名が来て案内役をつとめた。彼女は五人の男たちに守られて王太子シャルルに面会すべく騎馬で全行程十一日間の旅を続けた。

小説家堺屋太一氏の小説『世界を創った男チンギス・ハン』によれば、歴史上の人物の年齢を扱う場合には、現代の年齢に係数をかけて年齢観を修正して扱わなければいけないという。堺屋氏は日本人の場合を例に挙げているのだが、たとえば十五世紀に生存していたフランスのジャンヌ・ダルクの場合、十七歳を一・二倍して三を足すと、現代の

年齢で言えば、二十三歳ほどに当たる、つまり少女というより若い女性としたほうが、イメージとして適切だと考えられる。

映画などで見るジャンヌはたしかに成熟した女優が演じているわけである。妙齢の女性が処女のまま戦場に赴いた。成熟した女性の生理については、劇的な活動をする女性では生理は停止状態となる、というのが医学的な所見である。

ジャンヌには身の回りの世話をする少年小姓と懺悔聴聞僧が付き従っている。のちの五ヶ月におよぶ裁判で、やましいことはなにも無いと言い切った彼女のいきさきよきは、この毎日の懺悔の習慣に裏打ちされていたかもしれない。

ジャンヌにはガリアの血が流れていたのだろうか？一族の祖先にアレジアの戦いに参戦したゴール人がいただろうか？

ランボーがゴールの子孫だったかどうかは容易に想像がつく

さあ幸福に挨拶だ、ゴールの国の
鶏が、歌い鳴くそのたびに。

「地獄の季節」 錯乱Ⅱ 粟津則夫訳

さあ出発だ、と言って、彼はローマを飛び越してアフリカ大陸まで歩いて行ってしまっ
た。

夜の灯の下で

高田昭子

行間や二行空きは

溝を跨ぐようなもので

絵でも音でもないものが

今　そこから書きはじめられようとしている

数枚の原稿用紙は

愉快犯のように

ライターほどの火にあぶられている

そして　たばこの煙のように

誰かの鼻腔や咽喉を苦しめてゆく

空に吸いこまれるわけでもなく
拡散して やがて見えなくなる

この街の暗渠の蓋を

うっかり踏みぬいてしまったように
それは落ちて流れてゆく
あるいは振れた紙のなかで圧死する

三月、遙遠の。

石川為丸

みえかくれするめずらしい南国の蝶を追いかけて

三月は沖繩にいた。

過ぎた時代のずれた斜影をひきずったまま

私はただよい 揺れていた。

あれは、何年も前になる三月でした。母親が癌で入院したとき、私は組織の任務を優先して、見舞いにも行きませんでした。そして、あまりにも急な母の死でした。葬式だけは顔を出しましたが、長い間会っていなかった姉をはじめとして、親戚の人たちに責められました。「母さんに謝れ！」と連れていかれて拜んだ母の寝顔の静かさがかなしく、私には、なにも応えない母の口腔の脱脂綿の白さだけがつらかった

ろくでなしだな 私は 家族への背信を重ねてきたから

幼年期の思い出は すべて家郷の蔵のなかに

置いて出てきたつもり　私の

細身の自負すら

南西諸島の風に吹きちぎられそうだった

後悔はしなかったが、そのことが

私に　夕ぐれを複雑に曲げさせることになったのだろう

製糖工場の煙突からけむりが流れる

あまいにおいのただよう街は

安らかな夕暮れの時間に満たされていた

(記憶のそこには　戦争で

炎えあがってゆく街と

多くの死者がいて

くずれ去った　石門があり

人々がうちひしがれていた)

空には変わらないゆうばんまんじやー

砂糖黍うねる南部の道が続いている

遠い昔のこと

指笛鳴りひびく集会に参加して

警官に頭を殴られ 脳が揺れ さまよった三月の

白く乾いたひともとの道

ひからびた海星が転がっていた

あすこに置いてきたものを

いつか引き取りに行こうと思ってきたが

今ではどうしても思い出せないのだ

激しいものはなんだったのか

こころの問いは

琉球石灰岩の穴の一つ一つに染み入る

三月の雨

異土の闇深く入り込んだ、わだかまった根があつて

その地下からとりだすべき未知のかたち

うつすらと見えてくるもの

島のひとびとはかたみにささえあうものがあつた

私は、私できまよいゆれるだけで

島でのかなしみを

そのままにして

行くも 帰るもなく

まだ抜け出ていないのだが、

国をめぐるものごとの倒立のなかで

陽の在り処を気づかせるこの島の現在に

誠実な眼と折れないところをもつものは

くつきりと位置を立てるだろう

そのひとところだけをたよりに

みらいの島と呼んでみる

そこもとに 私は

私の位置を立てるだろうか

遠くへ

おかだすみれこ

ずるい

ひきょうだ

身勝手だ

タクシーが雨の街を夜の光をまどつてくぐりぬける

わたしは窓ガラスにじぶんをせめる

あのひとをホテルに置き去りにしてきた

今夜も

「ごめんね」と100回言ってもとどかない

いや届いているきつとあの真っ白い
ワイシャツの胸あたりまでは

「うん」とうなずいていて苦しそうだった
「わかってる」といってくれた

わかっていないのはわたしだった

どれもこれもいいわけ
あれもこれもほんとう

30年の空白が

硬質の驟雨のように
やさしくはげしくふりつづいている

あのひとのここから

水しぶきをあげて遠ざかるわたし

裏切らないということは

戻れないということだから

遠くへいくひとりでいこう

会うたびにはげしく雨がふるのはそのためだ

紙の言葉たち

みんな持っていけばいい

みんな持っていてどこかに棄ててくればいいのだ
さいしょからなにも持っていなかったのか

ちがう

手の中にあるものを隠すことに疲れただけだ

うまれたときから資質として備わっていた何か
見えるけれど見えないそれ

枯れ葉が雪のように降りしきり
バスは曲がるはずのない道を曲がる

空腹と眠気がどこかへいつてしまつて
あと何時間でも目を見開いて窓の向こうの見知らぬ夜を
吸い込んでいられそうだ

寒さと寂しきの区別もつかないこどもに戻つて
たいせつなカバンを抱えなおす
みんな持ってきたはずの

信じやすい紙切れが唯一の手がかり

バスが道をそれるたびにオトナになって

朽ちる木の葉のみどりが乾いてあかく染まった

だからもう一度だけひっそりと

あなたのなまえを呟いてみる

いとしいかなしいねむれない

どこまでいけばいいのだろう

しおれた花のように棄ててしまえばいいのに

空欄

清水鱗造

野原にドアがある

開けると向こう側は

こちら側と同じ野原になっている

ふらふら歩いていて

ドアを見つけると

開けたくなる

開けても開けなくても

向こう側は

同じ野原であることがわかっているけれど

開けてみる

ところで

四月に亡くなった母は

どこへ行っちゃったんだろうか

そう思うときには息を吸い込み

ドア構造の上空にそびえる

積乱雲を見ながら

ぼんやりする

この秋には

何回か蝶を見かけた

道を横切ったり

花にとまって蕊の間に

吸収管を挿し込んだりして

働いてから近くに来て

こちらを見たりして

さっさと行ってしまったが

どの蝶にも
空白の名札が
胸に付いていた

(原題「蝶を見かける」、「部分」 44 [2010.12])

水が走っている

水島英己

棘が人生の小川をぎっしりと流れている、
というのは吉増剛造の
詩のタイトル

それを読んで私は

会ったこともないミホさんの

甲高いが気にはさわらないその声と
普段着のような喪服姿を
たぶん何かを通して聞いたり見たりしたそれを

心の底に立たせていた

「死の棘」のミューズの逝去を悼む

レクイエム、それが吉増の詩のテーマの一つだが……

なにが流れているのか、あるいはなにを流すのか

小岩や国府台の病院や市川の流れ

加計呂麻の海のきらめき

崩れかかった建仁寺垣に囲まれて「家庭の事情」が

始まる、始まる、まるで

「初めに、ことばがあった」かのように「疑惑」があった、そこから

ミホと敏雄が熱中して編みあげた

かけがえのない罪の織物が流れている、流された

今になっても

そのひそやかなげりの孕む熱

いつまでも覚めない悪夢の檻の

まぼろしが棘のようにぎっしりと流れている

人生とは呼べない

なにかすつかり変わってしまった「こと」の川でも

そこを流れて、そこから始まる

「死の棘」もある

そして、その棘を

ぎっしりと流れているそれを

制圧しない、浄化しない、どこまでも熱中して編みあげてゆく

私たちは

(神ではない、神ではない)

最後のわたくし小説家たちであった、いやあるべきだ

「ムンダネ、ヤ、マカン、チュ、ドウ、バカ」(物の種を蒔かない人はバカだ)と
ミホさんは伸三さんに教えたという

すべての種を蒔き

その棘を心の底に深く育てよ

「だがすべては変わった。あの駿馬を乗りこなす者はいない。」

イエイツの嘆きも

ムンダネとして心の底に植えつけるのだ

そのうえを水が走っている

夜の海

一瀉千里

表面張力で 分断された世界は
特に 夜になると
どちらが上か下か 見分けがつかなくなる
夜の暗い海に ひとりで沈むにも
ただ だまって沈んでしまうのは
おもしろくない

たとえば 大声でわめきながら沈むとか
もしくは

盛大に 花火を上げながら沈むとか
そうすると せめて大勢の人が寄り集まってきて

自分が沈んでいくサマを
見届けてくれる

人は ある一定の時期が来ると
いやが応にも

沈まなくてはならないから

それならば 人魚のように美しく

プリマドンナのように華麗に

自己演出を試してみるのも 許される

テトラポットから 注意事項が聞こえてくる

かすかに かすかに

聞こえてくる

その声が 私をさして言ってくれるなら

もう少しの間

海の上で頑張れるかもしれない

越前クラゲが 巨大になって

海岸ベリを 意味なく浮遊しても

あれは食べれるんだよと 誰かがささやく

人々の食する口へ

本望という願いを抱いて

嬉々として食べられる日が やがて訪れるだろう

時計

富澤守治

誰でもがそれを知っている

幾許かの声を聞かせては、それらは名残り、こうしている「いま」にもかすれていく
記憶に刻まれた多くの物語りたち

置き去りにされることもなく

流れる文字放送のように、私たちに見えるのだが、忘れられていく、忘却

そんなことを見るたびに、ただひとつ、ぼくは気がつくのだ

その物語の時間は、もういまは終わってしまっているということ

それがどれほどか、心に傷跡を残しているものであっても

そこに記しるされた時間だけは、取り返すことはできない

そしてそれらがあまりに空しくて、口惜しいものであっても

あと少しでも時間があれば、あと少しそんなチャンスがあればと思う

あとひとつ、あとひとつと、あと少し

嘆きは多く、笑いが少ない

愛は少なく、性愛が多い

むすめたちの腰のあたりが気になる、寡黙で恵まれない若者たちよ

別にそれは悪いことではない

いつかそれは至上の愛につながっていくだろう

いまは、ただひとつの大切なときだ

愛を夢見るものたちよ、ふさぎこむな

私もまさしくそうなのだが、忌まわしい中年の男ども

彼らは本能に見境もなく、目にするすべてのものを経済的価値に切り替えて

正当化する

生活に必要な価値にだけ群がり、性愛を忘れたおばさんたち

生命と存在の理想を忘れてはいないか？

その有様こそはまさしく生存本能そのものではあるのだが、もう用はないらしい
しかし理性の立場からすれば、誰もが何かが論理的に間違っている

「時、トキを過ぎす」とはそれらほども「切実な」ものであるか？

呼びてかえりこぬ青春のひとコマがいつまでも続かないかのよう

本来の人生の貴重で清らかな時間はどこに行ってしまったのだろうか

日々は毎日のように変わりなければ良いのだ

多くの、多くのひとびとが時間を過ごしては、カレンダーを数えて、見つめている

もちろんただちにこの国の、この21世紀の初頭にはいかなる反論も可能である

「トキは耐えざるを得ない」のではないだろうか

走り去ることもできずに、ヒトはうずくまっている

分別のあるものたちよ、それを「優柔不断」と非難するか

そうではあるまい

事態は深刻だ

ぼくがこんなことを書いている2010年12月21日、火曜日

街に出てみれば、いつもの午後は年の瀬の匂いもせず

ようやく寒くなり、冷風が吹きさらす

雲がこの惑星を覆い、行灯のようにこの大地を照らしている

いくもの消えていった命を思い

いくつもの理不尽と、それらが持たらす絶望を思い

力ない自分を思い知らされる

いったいこんなになっても、もうすべきことの道筋が見えているのに

こんなにも答えの出せない、この「われわれ」というのは

いったい、何者なのだろう

時間は過ぎていく、チツクタツク、チツクタツク

ずいぶん長い1年であったようにも思われる

去年のアンソロジーを見れば、政権交代があったようだ

ずいぶん古いことのように感じられるのは、長い、本当に長く暑い夏があったせいだけだろうか？

これからも語られる言葉は多くあるはずだ

それはとてつもなく長い言葉になるはずだ

「時間」に話を戻そう、「いま」は絶対的に重大なことだ

「時計」というものは、実は「いま」を刻んでいるのだ

思えば私たちの頭を満たして、気がつけば心の奥底を浸して、侵していく

記憶のなかにあるキズには、いつも「いま」の文字がかけられていく

そんな罪なき罪状の「緋の文字」ども

そういうのを濡れ衣というのだ

冤罪は覆されなくてはいけない

—しかし世間にはなんと多くの人々がこの「冤罪？」に苦しんでいることか—
—念のために云っておく、不正な刑事手続きがあったことをいつているのではない—
—あれも本当にひどい話だ—

時間は過ぎていく、チツクタツク、チツクタツク

社会という「大池」の淵からは、逃げることでできない波が反して、襲うものだ
忘れるな、ひとときの回避行動の犠牲になったひとびとの苦痛を
数え切れない犠牲の連鎖よ

チツクタツク、チツクタツク、時計は「いま」を刻む

この時代は循環論法にせまりやすい、やがて意識は朦朧とするだろう

まさしくすりガラスの日々が続いている

どうにかして抜きたいものだ

時計の法則に則り、もう忘却してしまいたいのだ

よくもこれだけ耐えている、そんな行き先の見えないという、絶望が始まる前に別の道へと歩むのだ

真実の時間の経過、ときめき！

そのときはいつ来るのか

もう時間の割れ目が見えるぞ、とどろき！

昨日も雷は鳴り響き、目の前が真っ白になった

気がついてくれ、サージ電流に戦慄しているだけで、なにも知らないままにいる

友人たちよ

この年の瀬

寒く震えても

身を翻して、寄せる狂気は避けよ

うつむくよりは

深く思考せよ

来る春に言葉を挙げる、
ものたちよ

(2010.12)

Over The Hills And Far Away。

田中宏輔

●なんていうの●名前●なんで言わなあかんねん●べつに●ほんとの名前でなくってもいいんだけど●エイジ●ふううん●ほんまの名前や●そうなんや●エイジかあ●えいちやんて呼ぼうかな●あかん●そう呼んでええのは●おれが高校のときに付き合うとつた彼女だけや●はいはい●わかりました●めんどくさいなあ●なんやて●べつに●鳩が鳩を襲う●鳩と鳩の喧嘩ってすごいんですよ●相手が死ぬまで●くちばしの先で●つつつき合うんですよ●血まみれの鳩が●血まみれの鳩をつつきまわして●相手が動けなくなっても●その相手の鳩の顔をつつきまわしてるのを見たことがあるんですよ●それって●ぼくが住んでた祇園の家の近所にあった八坂神社の境内ですけどね●鳩が鳩を襲う●猿がべつの種類の猿を狩っている映像をニュース番組で見ただことあります●自分たちより小型の猿たちを●おおぜいの猿たちが狩るんですよ●追い込んで●追いつめて●おびえた小さな猿たちを●それとは種類の違う何頭もの大きな猿たちが●その手

足をもぎとって●引きちぎって●つぎつぎと食べてるんですよ●血まみれの猿たちは●
もう●おおはしゃぎ●血まみれの手を振り上げては●ほうほっ●ほうほっ●って叫びな
がら●足で地面を踏み鳴らすんですよ●血走った目をキラキラと輝かせながら●目をせ
いいっぱいみひらきながら●こないだ言ってた●よっくんって●いくつぐらいの人なん
●50前や●ゲイバーのマスターやったっけ●ふつうのスナックや●映画館で出会った
んやったね●そや●新世界の国際地下シネマっちゅうとこや●たなやん●行ったことあ
るんか●ないよ●付き合いは長かったの●半年くらいかな●ううん●ぼくには●それ
が長いのか短いのかようわからんわ●笑●よっくんと最後の最後って●どうやったん●よっ
くんか●おれが●よっくんの部屋で●よっくんの仕事が終わるの待っとなんやけど●
ひとりで缶ビール飲んでたんや●何本飲んだか忘れたけど●片付けるの忘れてたんや●
そしたら●それを怒りよってな●それで●おれの写真ぜんぶアルバムから引き剥がして
●部屋出たんや●それが最後や●よっくん●バイバイって言うてな●電車に乗ったんや
●電車のなかでも●おれといっしょに写ってる●よっくんに●バイバイ言うてな●写真
●ぜんぶやぶって捨てたっ●でも●おれ●電車のなかで泣いてた●ふううん●なんや
ようわからんけど●エイジくんと付き合うのは●むずかしそうや●そうや●おれ●気
まぐれやからな●自分で言うんや●おれ●よう●子どもみたいやって言われるねん●た

しかに●でも●そんなこと●ニコニコして言うことじゃないと思った●子どものときに●子どものようにふるまえなかったってことやね●だから●いま●子どものようにあつかつてほしいってことやったんやね●きみは●いまならわかる●あのとき●きみが●子どものように見られたかつたってこと●いまならわかる●あのとき●きみが●子どものようにあつかわれたかつたってこと●でも●ぼくには●わからなかった●あのとき●ぼくには●わからなかったんや●おれ●家族のこと●大好きなんや●ねえちゃん●かあちゃん●とうちゃん●ねえちゃん●かあちゃん●とうちゃん●ねえちゃん●かあちゃん●とうちゃん●ねえちゃん●かあちゃん●とうちゃん●ふううん●お父さんって●エイジくんと似てるの●似てるみたいや●とうちゃんの友だちが●とうちゃんと●おれが似てる言う言うて●よろこんどった●いっしょにおれと酒飲むのもうれいみたいや●鳩が鳩を襲う●関東大震災の火のなかで●丘が燃えている●木歩をかついで●エイジくんが火のなかを歩き去る●凍れ●と●ひと叫び●火は凍りつき●幾条もの火の氷柱が●地面に突き刺さり●その氷柱の上を●小型の猿が飛んでいる●氷の枝はポキポキ折れて●火の色に染まった氷柱のあいだを●小型の猿たちが落ちていく●大きい猿たちが落ちた猿の手足を引きちぎる●血まみれの手足が●燃え盛る火の氷柱のあいだで●ほおり投げられる●ばらばらの手足が弧を描いて●火の色の氷柱のあいだを飛んでいる●大きい猿の手から手へと●血まみれの手足が●投

げられては受け取られ●受け取られては投げ返される●鴉も鳩を襲う●ポオの大鴉は●
ご存知ですか●嵐の日だったかな●たんに風の強い日の夜だったかな●真夜中●夜に●
青年のいる屋敷の部屋の窓のところで大鴉がきて●青年にさきやくんですよ●もはや●
ない●けっして●ない●って●青年がその大鴉に●おまえはなにものか●とか●なんの
ためにきたのか●とか●いっぱい●いろんなことをたずねるんですけど●大鴉はつねに
●ひとこと●もはや●ない●けっして●ない●って言うんですよ●ポオって言えば●ク
ロネコ●あ●こんなふうにかタカナで書くと●まるで宅急便みたい●笑●燃え盛る火の
氷柱のあいだを●木歩をかついで●丘をおりて行くエイジくん●関東大震災の日●丘は
燃え上がり●空は火の色に染まり●地面は割れて●それは●地上のあらゆる喜びを悲し
みに●楽しみを苦しみに変える地獄だった●そこらじゅうで●獣たちは叫び●ひとびと
は神の名を呼び●祈り●踊り●叫び●助けを求めて●祈り●踊り●叫び●助けを求めて
●祈っていた●踊っていた●叫んでいた●雪の日●真夜中●夜に●エイジくんと●ふた
りで雪合戦●真夜中●夜に●ふたりつきり●ぼくのアパートの下で●雪をまるめて●
預言者ダニエルが火のなかで微笑んでいる●雪つぶて●四つの獣の首がまわる●火のな
かで●車輪にくっついた獣の四つの首が回転している●ぼくはバカバカしいなって思い
ながら●エイジくんにつき合って●アパートの下で雪つぶてをつくっている●預言者ダ

ニエルは●ぼくの目を見据えながら●火のなかを歩いてくる●ぼくのほうに近づいてくる●猿が猿を食べる●鳩が鳩を襲う●言うたやろ●おれ●気まぐれなんや●もう二度ときいひんで●たなやん●おれ●忘れてたわ●手袋●たなやん●おれ●忘れてたわ●おれの帽子●おれのマフラー●おれの●おれの●おれの●なんや●玄関のところにおいてたんや●毎日なんか忘れていくんやな●預言者ダニエルは●火のなかを●ぼくのところにまで●まっすぐに歩いてくる●凍れ●火の丘よ●凍らば●凍れ●火の丘よ●もはや●ない●けっして●ない●凍れ●火の丘よ●凍れ●火の丘よ！